

## ずいそう



## 戸惑いの三年

毛利 嘉之

昭和50年代の前半、3年近くの間、私は鳥取に住んだ。その鳥取では、それまでのどことも違う、幾つもの発見があった。

当時の私の頭の中には、北は寒くて南は暖い、という観念が染みついていた。それゆえ、北が海で南が山、という地形に馴染めず、冬場は、南の山地に比べ、北の平地の方が温いのが奇妙に思えた。地勢上それは当然なのだが、体がそうとは受け止めなかった。

年末に因島へ帰り、正月明けに、国道53号黒尾峠のトンネルを抜けると、鳥取県側が銀一色なのはともかく、北へ行くほど積雪が浅いのが不思議であった。

また、私の古里では、大潮時の潮差が3メートルなのに対し、日本海では0.2メートル。そのためか、どの海水浴場にも飛びこみ台の無いのが珍しかった。それに、瀬戸内海のように、沖合いに行く大船の姿を見かけなかったのも印象に残る。

海のことは大抵知っているつもりで私は、二つだけ初体験をした。

その一つは、夏に食する天然の生ガキである。冬を過ぎてのカキは食中毒を起こす、と言いついて聞かされていたため、夏場の生ガキは驚きであった。だが、潜って採られた大粒の生ガキの味は格別であった。

他の一つはカニ（松葉ガニ）の刺身である。瀬戸内のカニ（渡りガニ）を刺身で食べるなどは、聞いたことがなかった。その私が賀露港で食した刺身は極めて軟かで、味の方は今一、珍味の域を出なかった。

発見は内陸にもあった。鉄道の沿線に大きな野立ちの看板が見当たらぬことだ。それは恐らく、条例で規制され、それが守られていたためであろう。古里の自然の景観に十分な配慮がなされてのことに相違ない。

古里といえば、尋常小学唱歌の「故郷」が頭を過ぎる。「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川——」の作曲者・岡野貞一が鳥取の出身であると知った。彼が手がけた唱歌のうち、私の知るだけでも、「桃太郎」「日の丸の旗」「春が来た」「春の小川」「朧月夜」「児島高德」「紅葉」「水

師匠の会見」がある。それに、かの名曲「青葉の笛」の作曲者・田村虎蔵も鳥取の出であったとは。

古里ついでになるが、鳥取在住中の或る日、私のもとに、島の郷土史家・N先生からの封書が届いた。それによると、わが毛利家の遠祖は、八頭郡郡家町の毛利氏に由来するのでは、と書かれていた。そもそも毛利姓の発祥は、大江弘元を祖にした相模の厚木。その厚木で、元就の11代前の四兄弟から、吉田系・因幡系などに分かれたものらしい。私にとっては奇遇の知らせであった。

ここで失敗談を一つ。鳥取に転任することになったので、観光地図を開いてみた。すると、おちだに樽 谿公園の付近に、天然記念物「キマダラルリツバメの生息地」とあった。

それはてっきり特異な種のツバメが、留鳥として棲みついたもの、と私は早合点し、そこを訪れてみた。だが、どこにもそれらしい鳥影は見えなかった。不審に思って近くの人に訊いてみた。すると、それはツバメではなくて「蝶」とのこと。一知半解。大恥的一幕であった。

鳥取の大砂丘のことは、観光案内では承知していたが、訪れたのは初めて。県内の海沿いの大半が砂丘地であった。大砂丘の風紋の美しさもさりながら、広大なラッキョウの花畑やニセアカシアの豊かな花房を眺め、山芋・西瓜などの砂丘農業についても、若干の知見を得た。

伯耆大山の山頂から、弓浜一帯をつくづくと俯瞰したり、那岐山の頂上に立って、南側の高原に輝く無数のため池に瞳目したりなど、「県土全体が公園」の感を深くした。それらに、城跡からの眺めも加えておきたい。

県内には、中世以来の城跡が20余もあるらしい。そのうち、近世初頭においても城(跡)の形態を残していたのが、鳥取城・米子城(久米城)・羽衣石城うゑいしじょうの三つ。中でも珍しかったのが羽衣石城であった。

それは山城の典型で、急な細道を登りつめた所に、三層の貧弱な天守が、こともあろうに鉄骨・トタン葺き姿で存在していたのには仰天した。その城も今では改修されて、立派な風格を備えている由。

天守台から北側を見下ろすと、海を遠景に東郷池(4.5平方キロ、県内2番目)が、小さな円鏡のように陽光を返していた。

そうこうしつつ、三たび迎えた(県庁での)御用始めで覚えたのが、鳥取県民歌「わきあがる力」(團 伊玖磨作曲)だ。その歌詞には、大山・日本海・湯けむり・緑の大地・梨の実・稲穂・砂丘などが織りこまれ、生きるしあわせ、歩むよろこびが溢れていた。